

氏 名	高 橋 依 子
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 359 号
学位授与の日付	平 成 11 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	包括システムによるシャッハ・テストの特殊スコアの検討と精神分裂病者の思考障害

(主査)

論文調査委員	教 授 清水御代明	教 授 芋阪直行	教 授 乾 敏 郎
--------	-----------	----------	-----------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ロールシャッハ検査において、従来、主観的に取り扱われていた「通常でない言語表現」を、特殊スコアとして客観的に分類・数量化し、特に思考の歪みを中心とする人格特徴を明瞭に記述できる分類基準を作成することを第1の目的とし、それを用いて、精神分裂病者、非定型精神病者、神経症者、健常成人の反応を比較検討し、精神分裂病者の思考の特徴的な様相を明らかにすることを第2の目的とする。論文は、序説と第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部で構成される。

序説では、ロールシャッハ検査の有用性、実証性を重視するJ. Exnerの「包括システム」の意義とその問題点、「通常でない言語表現」を客観的・数量的に取り扱う特殊スコアの必要性を論じて、本研究の目的が述べられる。

第Ⅰ部では、ロールシャッハ検査の言語表現の取り扱いについて、過去の研究を検討し、「包括システム」の特殊スコアの意義と問題点を論じた。Exnerは「通常でない言語表現」を数量的に取り扱うために、思考の歪みを表す特殊スコア6つと、その他の特殊スコア8つを用いているが、この特殊スコアは、「包括システム」の他の多くの変数に比して実証的な裏づけに乏しく、記号の定義が一般に不明確で、分類を助けるべき事例も少ない。さらに、日米の文化的な違いから、Exnerの挙げる事例はわが国の被検者にほとんど出現せず、「通常でない言語表現」を特殊スコアとして記号化する基準とならない。わが国の被検者に適用できる特殊スコアの明確な分類基準を作成するために、論者がこれまで個人法で実施してきたロールシャッハ検査の記録から、無作為に、精神分裂病者と健常成人それぞれ200人、計400人の記録が抽出された。両群合わせて9017例(精神分裂病者群4457例、健常成人群4560例)の反応のすべてを検討し、Exnerの定義ではどの特殊スコアにするか曖昧なものも含めて、「通常でない言語表現」と思われる反応をすべて取り出した。その数は、精神分裂病者群で1646例、健常成人群で549例、計2195例である。これらの反応をまずExnerの定義によって分類しながら、各特殊スコアの定義の明確化を試みた。特に思考の歪みを表すとされる6つの特殊スコアについては細かく分類して基準を明確にし、多くの事例を添えた。また、これまで固執(PSV)に含まれていた機械的固執の定義を明確化して新たにPSVSの記号で独立させた。さらに、従来の14の特殊スコアに記号化できない「通常でない言語表現」に「特異な答え方(SD)」という記号を新しく導入した。「包括システム」の「通常でない言語表現」を表す特殊スコアに論者が新しく作成した2つの記号を加えた計16個の特殊スコアに、明確な定義と、日本の被検者の反応に基づく多くの事例を与えた。

第Ⅱ部では、思考障害を特徴とする精神分裂病者とそれ以外の被検者を比較して、論者が明確化した特殊スコアで思考の歪みを捉え得るか否かを検討し、特殊スコアに示される精神分裂病者の思考の歪みを分析した。精神分裂病者、非定型精神病者、神経症者、健常成人それぞれ40人(男女各20人)計160人に「包括システム」によるロールシャッハ検査を個別に実施し、反応を記号化した。「包括システム」に熟練した3人の判定者(論者を含む)の記号化はすべて一致した。思考の歪みを表すとされる特殊スコアは、思考障害を特徴とする精神分裂病者群に多く出現しており、精神分裂病者診断の客観的基準となりうることを示された。この特殊スコアは、症状だけでは識別しにくい非定型精神病者と精神分裂病者の識別にも有用で、また、非定型精神病者で思考の歪みをもつ者の検出にも役立ちうることを示唆された。特殊スコアによって、従来精

精神分裂病者の思考の特徴とされていたものが具体的・数量的・客観的に検討できるようになり、また、たとえば精神分裂病者には、偏倚言語として、造語だけでなく、不正確な言葉、文法的誤り、重複性が多いことなど、これまで特に取り上げられていなかった思考の歪みのいくつかの側面も明らかにされた。

第Ⅲ部は、論者が明確にした特殊スコアについて今後の研究課題を論じている。

論文審査の結果の要旨

H.Rorschachが創案したインクブロット検査は、彼が研究途上で夭折したこともあって、実施法、得点化（記号化）の手法、量的処理法、解釈仮説に関して多くの体系が形成されてきた。これを統合しようとしたJ.Exnerは、実証性のある体系のみを取り上げて「包括システムによるロールシャッハ検査」を構成した。論者は、早くからロールシャッハ検査の客観化を目指して数多くの研究を行い、「ロールシャッハ診断法Ⅰ・Ⅱ」などに著してきたが、実証性重視の立場から、いち早くExnerの方式に注目し、わが国の被検者に適用を試みて、そのさまざまな変数の基準と解釈法を、日本の被検者に合う形にする研究を進めている。本論文はこの多年の研究の成果である。

ロールシャッハ検査の反応に見られる「通常でない言語表現」は、被験者の人格の理解に重要な手がかりを与えるものとして注目されながら、客観的な分類基準がなく実証的な資料の蓄積が欠いてきた。思考障害のある精神分裂病者には「通常でない言語表現」が多いといわれているが、その客観的指標も確立されていない。「包括システム」は「通常でない言語表現」を記号化し数量的に処理しようとして、思考の障害を表す言語表現として6つの特殊スコアとそれ以外の人格特徴を表す8つの特殊スコアを挙げている。しかし、Exnerの特殊スコアは、記号の定義や基準が不明確で具体的な実例も少なく、実証性を重んじる包括システムとして弱点の一つとなっている。さらに、日米の文化的相違のために、わが国の被検者の反応の記号化にアメリカでの定義や実例をそのまま適用することはできない。論者は、Exnerの特殊スコアの分類基準を考慮しながら、わが国の被検者に見られる「通常でない言語表現」を検討して、実証的に特殊スコアを細かく分類し、明確な定義を与え、必要な新しい記号も導入して、それぞれに多数の実例を示した。この特殊スコアを種々の被験者群に適用して、思考障害を中核とする精神分裂病者が、思考の歪みを表す6つの特殊スコアを多く示すことを明らかにし、精神分裂病者の思考の歪みを分類して具体的に示した。この研究によって、従来、臨床的直観の名のもとに、ややもすれば恣意的に解釈されがちであった「通常でない言語表現」を、数量的・客観的に取り扱えるようになった。本研究の最大の意義は、今後、一定の訓練を受けた心理臨床家であれば誰もが、この研究に基づいて、「通常でない言語表現」を同一の基準で容易に記号化でき、思考の歪みを含む人格の記述、治療方針の決定などを客観的に行えるようになったことにある。この成果は、実施に大きいエネルギーを要する面接法によって、論者が十余年にわたって収集した記録から無作為に抽出した、わが国の健常成人200人と精神分裂病者200人のロールシャッハ検査記録のすべての言語表現9千例を検討して得られたものであり、その価値は大きい。

精神分裂病者、非定型精神病患者、神経症者、健常成人に新たに検査を実施し、論者が定義した記号化を適用した結果、思考の歪みを表すとされた6つの特殊スコアに精神分裂病者群と他の群との有意差が認められた。思考の歪みを表す6つの特殊スコアとその合成変数が、思考障害を伴う精神分裂病者に多く生じることは、これらが思考の歪みをもつ被検者の鑑別診断に役立つことを示すとともに、本論文の記号化の妥当性を裏づけるものである。また、この検討に当たって、多数の反応の分類が3人の専門家の間で完全に一致したことは、記号化の基準がきわめて明確で、信頼できるものであることを示すものとして注目される。

この思考の歪みを表す特殊スコアによって、精神分裂病者の思考の特徴を分類し、具体的・数量的・客観的に検討することが可能になった。精神分裂病者の思考障害の表現とされてきた造語や思考奔逸などを客観的に捉えただけでなく、文法的誤りや色彩と形態の混合した不調和結合など、従来重視されていなかった思考障害の様相が精神分裂病者に存在することが示された。

特殊スコアが、思考障害を伴う精神分裂病者と、思考障害を伴わないが症状の類似した非定型精神病患者との識別に有効な情報を提供するという発見も、臨床的に有用な貢献をなすものであろう。

心理臨床の分野で実証に徹して研究を進める論者の姿勢は貴重であるが、本論文にもなお問題が残されている。論者自身

も、分析結果に基づいて、思考の歪みの程度の判定基準など再検討の余地を残す箇所を指摘しているが、たとえば思考の歪みについても、検出率のみでなく誤検出率にも注目して総合的な診断成績を高める研究が必要であろう。論者のますます活発な研究に期待したい。

以上審査したところにより、博士（文学）学位論文として価値あるものと認められる。なお1999年1月26日調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。